

もとた

みちしよう

こうてい

ものそ

本立ちて道生ず。孝弟なる者は其

じん な

もと

れ仁を為すの本か。

本立而道生。孝弟也者。其為仁之本与。

本とは、仁です。仁とは親子兄弟姉妹の間のやさしさ、思いやりなど心を通じ合う仁愛の情のことです。仁にはもう一つ意味があります。それは、仁義礼智まで含めての仁徳の意味もあります。道とは、人としての生き方考え方のことです。孝は親子の親愛仁愛の情のことです。弟は兄弟姉妹の親愛仁愛の情のことです。

つまり、仁愛定まれば人としての生き方考え方は自ずと生じてくる。親子兄弟姉妹の間の仁愛の情は、仁徳ある行いができるようになる本ではなからうか、ということなのです。

仁は愛着形成で、そのSDGsにつながる

人間、新しい命が誕生した後、母親の中で生物・人としての進化の過程を経て未熟なままこの世に生まれてきます。そして、家族や周りの大人に育てられながら、自立自律へと成長し自ら修めていくようになります。そしてやがては社会の中で何をしよう生きていいのか、悩みながらも調べ、考え、自分の進路を決めていきます。

その成長は、仁愛など温もりある人間関係あつてこそ人間として成長していけるのではないのでしょうか。これは、親など大人が愛情を注ぎ育てることで自然に身に付くものだと思います。心理学では「愛着形成」といいます。論語では、仁愛です。二〇〇五年文部科学省は、「情動の科学的解明と教育などへの応用に関する検討会」で、「適切な情動の発達は、三歳くらいまでに母親をはじめとする家族からの愛情を受け、安定した情緒を育て、そのうえで発展させていくことが望ましいと思われる」と、愛着形成の報告がなされました。もちろん、この期間だけでなく、形成されていなければ、その後でも育ち安定していくことは経験則としてありますが、必須であると思われまます。だから、今では、社会全体で子育てをしていく体制が整いつつあります。

この愛着形成からの心の通じ合う人間関係、仁愛こそが「本」ではないのでしょうか。これはやがて友人、種々の人間関係に広がり、米教育研究団体が提言する高次の問題解決力形成に第一次的に必要な組織の受容風土と秩序に昇華すると考えます。又万物へ広がり「SDGs」に発展していると考えます。

仁愛から仁義礼智の仁徳、道徳へ

この仁愛は義を産み出すと考えます。義は宜で、自分も

家族等も愛する故に、生活や社会生活など宜しきに適うよう育むのです。自分も人も大切にすることや服を着替えたりの自分でご飯を食べられるように育みます。そして挨拶したり、お菓子の人と分け合ったりできるように育てられます。それはやがて、具体行動で相手を敬う礼を産み出します。するとこれらが総合的に働く智が育ちます。生まれながら具わっているこれらを磨き修めると、信頼され信頼することができるようになります。

ちなみに、学習指導要領に示されている学校道徳の指導内容は次の四つにまとめられています。自分自身に関すること、人間関係に関する事、社会との関係に関する事、自然など人間の力を超えたものへの畏敬の念の四つです。

これらと論語で説く内容はほぼ同じだと考えます。科学技術は進歩しても、孔子が生まれた二五〇〇年前から人間の心はあまり変わっていないところもあると考えます。なぜなら、この間の各時代時代に、大切だと思ふ生き方考え方を先人は記録に残してくれています。それらに共通するものを見て法則性を帰納すると、論語に説く内容と一致しているものが多いことに気づきます。しかも、今の心理学や脳科学で科学的に証明されることも多くあります。

渋沢栄一は、論語と利を二つのSDGsだ

二〇二四年新一万円札に描かれる渋沢栄一は、ある時

「本立而道生」

と自書し額にして、生家の玄関に掲げました。それは、今でも埼玉県そこにあります。

明治から大正にかけて実業界で大いに活躍した様子は先日大河ドラマで放映されたところです。今の企業は一〇〇年企業を目指しているものが多いようですが、一〇〇年前彼は五百もの会社立ち上げに関わり、その多くは今でも発展し続けています。

なぜでしょうか。

それは、利を求める実業界でこそ道徳が要る、それは論語にあると説き、実践したからではないのでしょうか。例えば、身寄りのない子やお年寄りを東京養護院に引き取りお世話するなどしました。しかも、公費支出を議会で否決されると、民間で費用を集め運営を続けていったのです。このように利と仁愛から産み出される義は一つのものとして捉え行動した功績は、枚挙に遑がありません。

生き方の本を学び、生き生きと

混乱の今こそ、幕末混乱の中で人々のことをを思い決断し行動された正弘公等先人の意に思いを馳せ、大事だと考え残してくれた伝統ある古典、漢字文化を学び直し、生涯に渡り生き生き活潑地に生き、その「本」を社会に推し広め、社会の一隅を照らしていきたいものです。